

力は矯正0.6にとどまつた。

本症の発生機序には脂肪栓塞説，血管障害説等々あるが，考察を加えてみたい。

33. 回腸ポリープとメッケル憩室を伴つた腸重積症の1治験例

(外科)

○村瀬 茂・武田剛一郎・藤井 昭芳・
村田 順・馬淵 原吾・齊藤 正光・
倉光 秀磨・織畑 秀夫

患者は29歳の男性，腹痛を主訴として某病院に入院，内科的に治療するも症状の軽快を見ず，5日後下血，当科へ入院した。腹部全体に膨満著明，腹部単純X線写真にて Kerkring 皺襞，Nivean 著明，開腹術を施行したところ，回腸末端より約 60cm 部位の回腸回腸重積症であつた。重積部位を切除し，端端吻合を行なつて治癒せしめた。切除回腸にはポリープと，憩室を認め，これが先進部となつたと思われる。成人の回腸回腸重積症は比較的まれな疾患であり，確定診断が困難なことが多い。この症例をもとに多少の文献的考察を加えて報告する。

[特別講演]

ホルモン制御機構における生体アミンの関与

(薬理) 野本 照子

近年，下垂体前葉ホルモン分泌の調節は，視床下部ホルモンといわれる放出ホルモンを介して行われることが明らかとなった。この放出ホルモン (RH) が高濃度に分布する正中隆起には，TRH をはじめ，CRH, PRH, FRH などを含む軸索終末が集合し，それと接する毛細血管により，RH が腺性下垂体への液性伝達される。一方，正中隆起にはノルアドレナリン (NE)，ドパミン (DA)，セロトニン (5-HT)，ヒスタミン (His) などの活性アミンが高濃度に分布し，神経系と内分泌系との接点において下垂体機能調節に対する重要な役割を演じていると考えられている。しかし，アミンの作用部位およびその機序については明らかでないが，末梢から下垂体に働きかけるよりは，正中隆起を介する調節機構への関与が大きいとみなされている。

TRH の分泌は前視床下部の電気刺激で促進され，この部位はまた寒冷刺激の際に TSH の分泌を高めるのに必要な部位である。しかし，視床下部-下垂体-甲状腺系におけるアミンの関与は多様でなお統一した見解が得られていない。

まず，発言期に不可欠な甲状腺ホルモン維持への交感

神経系の関与をみると，血清チロキシンは交感神経遮断で低値を示すが，トリヨードチロニンは正常値との間に差がみられず寒冷刺激に対する反応も有意ではない。

次に，成熟動物における実験的カテコラミン，インドールアミンの生合成阻害または化学的交感神経遮断を行ない，合成 TPH あるいは寒冷刺激による下垂-甲状腺の反応を検討すると，TRH に対する応答は，カテコラミンの阻害では影響がみられず，5-HT の阻害では低下したが，寒冷に対しては逆で，TRH による反応が低いものがむしろ寒冷によく反応することを確認した。

これらの事実より，5-HT はむしろこの系に対して抑制的に，カテコラミンは促進的役割を演じていると推論する。

[シンポジウム]

「救急疾患の初期治療」

1) 心疾患の救急医療

(心研内科) 高橋 早苗

救急医療の対象となる心疾患として

- 1 Cardiac arrest
- 2 Syncope
- 3 Caidiogenic shock
- 4 Caidiac arrhythmias
 - a) tachyarrhythmias
 - b) bradyarrhythmias
- 5 Acute myocardial infarction
- 6 Cardio-pulmonary emergencies
- 7 Acute dissecting aneurysms
- 8 Acute Cardiac tamponade

が挙げられる。救急医療全体からみると，東京消防庁の調査では昭和50年9月15日から昭和51年2月14日の153日間の心疾患の頻度は急病で救急隊が救護した54,956件の中2,171件 (3.45%) と数の上では余り多くはない。しかし最近の死亡統計でも判明している通り生活環境，食習慣の変化に伴い心疾患の占める位置は大きくなりつつあり，また消防隊が救護した急性心疾患2,171例中その後死亡したものは128例 (5.9%) と生命に直接関与することが多いので，救急医療に当っては正確でかつ迅速な病状の把握と治療が必要であるのは言うを待たない。また先に挙げた急性心疾患の中では，急性心筋梗塞，急性解離性大動脈瘤，急性心タンポナーデ等，場合によつては外科手術の時期が救命の鍵となる例があるので，その判断も大切であり，またそれが可能な設備，人